

人と人を結ぶお茶

「夏も近づく八十八夜……」新茶の季節になってきました。

お茶は、いつの頃からか日本に根付き、単なる飲料であることを超え、日本人の生活文化や精神生活まで深く作用してきたものの一つです。「茶の間」「茶飲み話」「日常茶飯事」など、茶の付く言葉が日常生活を含んだ言い回しで人々の生活の中に定着していたこともそれを示しています。

お茶は、古くから日本人に親しまれてきました。旧額田町宮崎地区では、いつの頃から栽培されていたのでしょうか。宮崎のお茶は、江戸時代より盛んに栽培され、明治になると産業として確立されてきました。明治一七年の資料を見ると、茶業組合員数は一三〇人、炉（ホイロ）製茶道具で、茶を揉むときに使用。炭火で下から暖めて使用）数四五三台で、一戸当たり三・五台所有していたことがわかります。もともとこの地域では、自分の家で飲むお茶は自家生産をしていました。そして、自分の家の「味・風合」を持っていました。この味と風合が、人と人を結ぶ役割を果たしていました。寄り



茶畑の風景（東河原町）

合いなどの「お茶当番」では、自分の家のお茶で接待をしたというのもそのことを示しています。まさに人と人を結びつけるお茶です。素材ですが、とても温かみのある味です。このことが、宮崎地区で茶産業を発達させた背景の一つだと思います。

この人の温もり、自然の恵みが一杯詰まっっているお茶が宮崎地区で生産されています。ぜひ、家族で味わってほしい一服です。

図書館交流プラザ岡崎むかし館主任専門員

野本 欽也

パーキンソン病について

背中を前かがみにして小まただで歩く人を周りで見かけないでしょうか。このような人は年のせいではなく、パーキンソン病という病気でそういった歩き方をしているかもしれません。

パーキンソン病は、脳のある部分の神経の調子が悪くなるために、うまく情報が伝わらず、体の動きや気分が障がいが出てしまう病気です。病気の原因については現在のところはつきりとわかってはいませんが、脳の老化などを始め、いろいろな要因があるようです。この病気になる手が震える、体が硬くなる、うまく動かない、よろけて転びやすいといった症状が出てきます。それ以外にも便やおしっこが出にくくなったり、表情が硬くなったり、気分がふさぎ込んだりする人もいます。

専門家（この場合は神経内科）が診察による症状の確認と脳のM

Rーなどの検査結果を総合することで、パーキンソン病なのか他の病気なのかを判断します。

パーキンソン病と診断がついた場合は、薬で症状を改善することが期待できます。薬は何種類もあり、症状や年齢に応じてその人にあったものを処方していきます。そして、経過をみながら薬を調整し、その人ができるだけ快適に日常生活を送れるようにしていきます。

このコラムを読んで思い当たるふしがあるかたは、かかりつけの医師に相談し、市民病院神経内科を紹介してもらいましょう。

岡崎市民病院 神経内科

副部長 小林 洋介

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。